



「Adelaide大学からの新参者」

院長 西田 敬

碌でもない事許を為てきた報い歟、何を云うにも言訳を先にする事が習い性となった。然し、前以て一言断って置かないと始まらぬ事象は、世間には幾らもある。例えば、人類発生の黎明期、神話の世界。奇跡的な寓話が有触れる。故Scully博士が心血を注いだ万国共通の卵巢腫瘍分類（WHO）も然り。性腺腫瘍の分類としてはまず、冒頭に示される可きは、やはり種の保存の要で遺伝子の運び屋である胚細胞が腫瘍化した、胚細胞腫瘍が対象と為る筈。ところが豈図らんや、先ず、息堰き切って「イ」の一番に躍り出たのは上皮性腫瘍の範疇。題してcommon epithelial tumours。此麼腫瘍群は精巢には存在せぬ。日本語では？無理にでも和訳すれば禅坊主も呆れる程の頓珍漢な蒟蒻問答的な訳文に為りそう。目立った上皮成分が存在している筈も無い卵巢原基から発生する腺腫群で腺癌をも含む。なにしろ悪性卵巢腫瘍の80%以上を占める一大派閥の領袖、徒疎かに取りあつかもそもそものまのほねは取扱えぬ。抑抑、何処の上皮成分から発生し

た乎に就いても、卵巢の漿膜、或は卵管粘膜炎から近傍の臓器の漿膜まで、諸説あるが確証はない。FIFAならぬFIGO（世界産婦人科連盟）が定めた卵巢癌の臨床進行期も、起点が曖昧で中てにならぬ事、夥しい。而してJAMA（世界医師会学会）からは、卵巢癌のスクリーニング試験など遣らぬが益し、大いなる無駄であると切つて棄てられた。茲にきて、躍り出たAdelaide大学からの新参者が凄まじい。再び卵巢の原基に由来を求めた。何しろ哺乳類発生期の初期、胎生2～3週ごろに形成される生殖隆起の中に含まれる上皮様細胞（epithelial-like cell）が起源である可能性が云々される位だから話は古い。故Scully博士の睨みが消えた現在、斯かる新説が続出し、卵巢癌の由来が群雄割拠、再び混沌と為る。

初期像が曖昧で、経膈超音波検査から腫瘍マーカーCA125測定を駆使しても早期発見が不可能となれば、発症-死亡率（incidence-death ratio）の高さは70%近くに上り、嘗って中世ヨーロッパ全土を震撼させ、恐怖のどん底に叩き込んだ黒死病、ペスト（plague）の死亡率をもりょうが凌駕する。

斯かる厄介な業病を前に、医学が現代女性に示し得た戦略は、敢えて真正面から戦うのではなく業病から身を躲す、詰りvulnerable phase（披攻撃時期）を予防的にずらしておく事で強い攻撃を避ける、之をAngelina Jolie戦略と謂わんか。

